

平成30年度 国家一般職本試験（基礎能力試験） 講評

No.	科目	出題内容	正解	正答率*	講評
1	文章理解 (現代文)	内容把握	4	A	【文章理解（現代文）】 6題の出題は変更ないが、内容把握：5題、空欄補充：1題という、例年と異なる出題内訳となった。かつ、例年に比べれば全体的な難易度もやや高い。内容把握で、要所要所で文中の語句が用いられているものの、文中にはない因果関係が捏造されている誤答肢において正否の判断が難解なものも含まれており、No.4、No.5は正答率が下がったかもしれない。とはいえ、本文を正確に読むことができれば、正解肢自体は決して判断に悩むものではない。少なくとも、6題中5題を正解したいレベルである。
2		内容把握	4	A	
3		内容把握	3	A	
4		内容把握	5	A	
5		内容把握	3	A	
6		空欄補充	2	A	
7	文章理解 (英文)	内容把握	5	A	【文章理解（英文）】 内容把握3問、文章整序1問、空欄補充1問で全5問の構成、ならびに文章量や難易度に大きな変化はない。近年、英文の正答率が非常に上がってきており、今年の英文の正答率も高かった。基礎能力試験の攻略としては、知能系科目を重点的に対策する、という点が浸透してきているようだ。空欄補充の問題の正答率は低かったため、できれば4問、少なくとも3問を正解したいところである。
8		内容把握	4	A	
9		内容把握	3	A	
10		文章整序	1	B	
11		空欄補充	2	C	
12		判断推理／ 数的推理	論理	1	
13	対応関係		4	A	
14	順序関係		3	A	
15	対応関係		4	B	
16	数量推理		3	B	
17	順序関係		4	C	
18	軌跡		2	C	
19	正多面体		5	A	
20	確率		正答なし	—	
21	図形の計量		1	C	
22	比・割合		3	B	
23	仕事算	仕事算	2	C	【時事】 我が国における通信や放送、我が国の近年の法や条約をめぐる動向等、各国の近年の情勢等の3問の出題であった。我が国における通信や放送は、一般常識の範囲でも正誤の判別ができる選択肢もあり、問題としては平易である。我が国の近年の法や条約をめぐる動向等は、日ごろからの新聞記事やニュース、LECの時事対策で十分対応できる内容である。各国の近年の情勢等は、欧米と中国の情勢等であるから、社会科学の知識と時事対策ができていれば、容易に正解肢を見つけられる問題である。いずれの問題も基本レベルから標準レベルであるので、3問中2問以上正解することが可能である。
24		平均算	3	B	
25		資料解釈	実数	4	
26	資料解釈	指数・増減率	5	C	【資料解釈】 棒グラフ1題、表1題、フローチャート1題である。 No.25：<実数・表>標準的な問題で回答できた受験者も多かったと思われる。No.26：<指数・表>全体の人数が示されておらず、サンプル調査内の割合のみが示されている問題。線分図による分析が有効である。No.27：<フローチャート>難問。図が複雑であり、数値も多い。また、厄介なのが一次卸の輸入パターンには、独立行政法人農畜産業振興機構放出から直接購入した分のほか、同機構から乳業メーカーを経由して一次卸に流れる分が含まれることである。正答率は10%を切っており、極低い。満点を取らせないための問題と見てよいだろう。
27		実数・構成比	1	C	
28		時事	我が国における通信や放送	2	
29	我が国の近年の法や条約をめぐる動向等		3	B	
30	各国の近年の情勢等		1	A	
31	自然科学	原子核、放射線	2	C	【自然科学】 国家一般職試験となってから7年連続して、物理、化学、生物からの出題で定着している。3分野とも、出題頻度が低めのテーマからの出題であったが、正解肢の内容は、基礎的な内容で構成されていたので、しっかりした知識があれば正解にたどりつきやすかったといえる。 物理：原子核、放射線からの出題であったが、日常生活の感覚でX線について何となく正しそうと判断し、肢5を選んだ者も多かった。肢2、4は地学の知識からも判断できたので、地学の出題はみられないが、自然科学の総合的な知識も大切である。 化学：有機化合物の分類について、官能基の特徴や各化合物の特徴がわかっているならば、正解肢は基本的な内容であったが、有機化学まで詳しく学習する者が少ないので、正答率は低めとなった。 生物：植物の環境応答について、肢1～3の植物ホルモンの詳細までわかっているなくても、肢5の光周性については基本的な内容で正解ということがわかりやすく、正答率は高かった。
32		有機化合物	1	C	
33		植物の環境応答	5	A	
34	人文科学	明治・大正期の文学	4	C	【人文科学】 日本史：日本史の出題が文芸になったのか、日本史として近代文学を出題したのかは不明であるが、設問の内容自体は完全に文芸の範囲であった。近年は、公務員試験で文芸がほとんど出題されていないことから、正答率は知識系問題の中ではもっとも低かった。それほど難しい問題ではなかったが、正答率をみる限りでは、捨て問題であった。 世界史：アメリカ史自体は公務員試験で頻出のテーマではあるが、過去問に似たような選択肢がほとんどないことから、過去問演習を中心に勉強してきた多くの受験生にとっては難問であった。しかしながら、きちんと世界史を勉強していた人は確実に正答しているようである。 地 理：正答率が非常に高い。正解肢がプライメートシティであること、他の選択肢も日本語の意味を考えて、誤りと判断できることなどが要因であろう。 思 想：古代ギリシャ哲学は、そこそこ出題が多い分野であるが、思想家とキーワードの組合せでは解けず、思想の内容をきちんと理解していないと、正誤が判断できなかったため、思想の問題としては難しい問題に入ると思う。今年の人文科学は、地理で1問正解し、世界史か思想か、どちらかを正答して、2問正解したいところであった。
35		20世紀以降のアメリカ	4	C	
36		人口や居住	5	A	
37		古代ギリシャ哲学	2	C	
38	社会科学	我が国の行政	1	A	【社会科学】 法学、経済、社会から各1問ずつの3問である。法学は、我が国の行政に関する法律からの出題であり、公務員を志望する者ならば必ず得点源にしてほしい問題である。経済は、第二次世界大戦以降の日本経済史であり、よく出題されているテーマで、比較的平易な問題といえる。社会からは科学技術について幅広く出題されたが、いずれの選択肢も平易である。いずれも基本レベルから標準レベルの問題であり、3問全部正解しておきたい。
39		第二次世界大戦以降の我が国の経済	3	A	
40		科学技術の活用	5	B	

※ 正答率（A：60%以上、B：40%以上60%未満、C：40%未満）は、LEC公務員試験 受験生応援企画『本試験無料成績診断』のデータ（6/21時点）に基づいて算出しています。

本成績診断のご利用方法等の詳細は、LEC公務員Webサイトの専用ページ（<http://www.lec-jp.com/koumuin/juken/seiseki/>）にてご案内しています。



KL18207